

内山正熊と大内山塾（１）

UCHIYAMA Masakuma and his School for Chinese Students

藤 原 雅 憲

Masanori FUJIWARA

１．はじめに

本稿は慶応義塾大学名誉教授・内山正熊氏（1918年－2011年。以下、内山と略称する）が、1983年から1998年にかけて自身の設立した大内山塾（三重県度会郡大内山村1115ノ1（現大紀町））を通して実践した教育事業を概観する。大内山塾は中国の若者を招聘して研修を行い、将来の日中交流の架け橋となる人材を養成し、もって良好な日中関係の形成を目指した草の根を作ることを目としている。



写真１．設立当時の大内山塾

筆者はこの教育事業に日本語教師として加わっていた。土曜日の夕方、近鉄名古屋駅を発ち、松阪で下車。紀勢線に乗り換えて、紀伊長島の1つ前の無人駅「梅ヶ谷」で降りる。塾生が迎えに来てくれていて、話しながら歩いて塾に到着。夜10時頃から3時間、日本語

の勉強の仕方を話したり日本文化の紹介をしたりする。翌朝7時に起床。塾生が作ってくれた朝食を取ったあと、日本語の授業を始める。1時間の昼食後、4時過ぎまで授業を継続。4時30分ごろの電車で帰宅。ある時は、内山とご子息の正康さんの引率で塾生一同、筆者が勤務する名古屋大学を訪ね、筆者が担当する日本語クラスに参加。昼時は学生食堂で談話したりして国立大学の雰囲気を楽しんでもらったりした。

内山が亡くなった2011年の6月、大内山塾同窓会により『春風化雨～内山正熊先生を偲んで』という冊子が出版された。元塾生による追悼文集である。「春風化雨」とは、草木の成長に適した風と雨を表し、転じて、よい教育を指すという。その「刊行の言葉」に、「それぞれが今日を迎えることができたのは、ひとえに先生と先生のご家族、大内山塾の理事、賛助会員、日本語の先生、地元大内山村の役員（元）と村民の皆さま、研修先、塾の事務員など数多くの方々のご協力のお陰であったと、深く感謝を申し上げます。これからもわれわれは大内山ファミリーの絆とご恩を大切に日夜邁進していく所存でございます」と綴られている。ここに内山の「よい教育」の成果が十分に表されている。

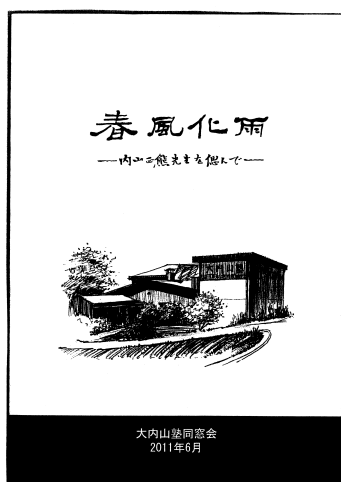


写真2 2011年に刊行された内山氏追悼文集

内山が行った教育実践の記録は、『大内山塾年報』第1号～第14号、『大内山塾十年の歩み』、『大内山塾を巣立った若者達』に記載されている。しかし、それらすべて紙媒体のものであり、多くの人には伝えられていない可能性が高い。今日のようなインターネットの時代では、電子化された記録こそが内山の功績を広く伝えることができる。そう考えて筆者は、上の記録の伝達者の立場を取り、内山の記した内容を整理して引用することに努めたい。

2. 大内山塾が創られるまでの経緯

2. 1. 塾創設まで

内山の著書『神戸事件－明治外交の出発点－』（中公新書681 中央公論社、昭和58年）の著者紹介欄には次のように記されている。
内山正熊（うちやま・まさくま）
1918年（大正7年）、東京に生まれる。
1941年、慶應義塾大学経済学部を卒業。現在、慶應義塾大学法学部教授。専攻、国際政治外交史。

著書 『国際政治学序説』（三和書房）
『西洋外交史』（慶応通信）

『外交と国際政治』（慶応通信）

『現代日本外交史論』（慶応通信）

『現代外交論』（有信堂）

訳書 R.C.K.エンソー『第二次世界大戦史』（岩波新書）

内山が慶應義塾大学でどのような授業を展開していたかについては、福澤武（2007）の証言がある。

「半世紀程前、日吉で内山正熊教授の国際政治論を聴き、三田へ進んでゼミを選ぶとき躊躇なく内山ゼミを志望した。機会均等、門戸開放の内山教授は“来る者は拒まず”で志望者全員を入れてしまわれたので、初めは教室に入り切れない有様でどうなることかと思っただが、その内に落ち着くべきところに落ち着いた。日々変化する国際政治の最新情報を集めて講義の準備をされる内山教授は、前の晩徹夜をして教壇に立たれたようである。教室には教授の気迫と迫力が充満した。ただ、ノートは極めて取り難かった。しかし、その講義は速記録にすることよりも、国際政治を通して物の見方、考え方を学習すべき内容だったから、ノートが取り難いことは然程問題ではなかった。

戦争遂行のための戦略と個々の戦闘のための戦術について最初に講義されたとき、日本軍の真珠湾攻撃をルーズベルト大統領は事前に知っていたにも拘らず、キンメル太平洋艦隊司令長官に知らせなかった例を挙げて、対日戦の最終勝利の戦略の見地から、真珠湾における戦闘では犠牲を払う戦術をとったと言われた。現地の司令長官に日本軍が真珠湾攻撃に向かっていることを知らせれば、太平洋艦隊を真珠湾に集結させておかなかったに違いない。それを敢えて真珠湾で犠牲を払うことによって、米国民の心を“日本を撃つべし”という方向へ向ける道を選んだというのである。“リメンバー パールハーバー”は日本に

対する敵愾心を煽る絶好の標語となった。

内山ゼミではE.H.カーの“危機の20年”とか当時少壮気鋭の学者だったキシンジャーの“核兵器と外交政策”等を使って学んだが、これがビジネスの世界で働く身になって大いに役に立った。私は社長に就任したとき社員への挨拶で、目先の利益のみに目を奪われて長期的展望を失ってはならないと述べて、学生時代に内山教授から推薦されて読んだE.H.カーの“平和の条件”について、この本を読んだ時の私の驚きを話した。カーは第二次大戦で英国がドイツの猛爆を受けて大変なピンチに追い込まれている中で、この戦争が終わった後二度と戦争を起こさないためにはどうしたらよいか、平和の条件は何かを考えていたのである。おそらく空爆で防空壕に避難しながらも考えていたのではないか。明日をも知れぬ状況の中で、よくも戦後の世界平和確立を考えることができたものだと私はカーの姿勢に驚嘆したのである。私が社長に就任したのは1994年6月で、果たして景気が回復することなどあるのだろうかという状況だった。今期どうやって利益を出すかということにきゅうきゅうとしていたが、私は危機におけるE.H.カーの話をして、長期的展望を失わないようにしようと社員に呼びかけたのである。

内山ゼミで学んだことは懋じの経営学などより余程企業経営に役立つものであった。そして純粋で真摯な内山教授の姿勢は昨今の社会の各分野に強く求められているものである。内山ゼミに学ぶ機会を与えられたことを改めて有難く感謝申し上げると共に、自らの姿勢を正すことを忘れてはならないと自省する次第である。」

2. 2. 信念

内山（1995）では次のような信念を述べている。

「賠償といえば、第二次大戦後中国が日本にこれを求めなかったことは記憶に新しいところである。……。周恩来総理が述べた言葉は印象的である。『日本は甲午戦争以来、八十年の長い間わが国を侵略してきた。ことに東北（満州）事変以後、わが国が被った人命、財産の損害は莫大なものである。われわれはこれを深い怨みに思っている。しかしこの怨みの八十年も日中友好二千年に比べればわずかな時間である。われわれはいまこの怨みを忘れようと努力している。怨みを忘れてこれからの日本と手を握ってアジアを強く大きくしよう』。いうまでもなく日本が敗れたとき、中国は徳を以て怨に報いたのである。日清戦争以来半世紀にわたり筆舌を絶する侵略を行った日本に対して、復讐もせず、賠償もとらず徳を以て報いる中国に対して、われわれ日本人は何を以て報いるべきであろうか。それは、日本人が姿勢を正し、かつての富国强兵、脱亜入欧、欧米追従、アジア軽視の過去を反省して共生共栄の平和の道を選ぶことであろう。」

日中国交正常化になったのは1972年9月である。この時「日本国政府と中華人民共和国の共同声明」が発表された。調印は、日本国内閣総理大臣・田中角栄と中華人民共和国国務院総理・周恩来との間で行われた。「声明」の中で、日中国交正常化がなされたこと、中華人民共和国政府は中日両国国民の友好のために、日本国に対する戦争賠償の請求を放棄すること、などが確認された。内山は、未来志向を目指す中国政府の姿勢に強い共感を持ったにちがいない。

2. 3. きっかけ

その信念が実行されるにはきっかけが必要となる。内山には次のような4つのきっかけがあった。

「それ（＝きっかけ）は大分前のことになる

が、1979年（昭和54年）、中国から1通の手紙が舞い込んで来たことに始まる。その黄色い紙の手紙を見ると、中国といっても北京、上海といったところではなく、青海省というところからであった。当時私は青海省などどこにあるかも知らなかった。地図で見ると、それは中国も遙か西の地方でチベットのとなりにある奥地である。そんなところに何の関係があるのかと思ってよく見ると、差出人は青海師範大学副教授の周玉潘と書いてあった。それは、太平洋戦争末期に日本に留学していた周玉潘君から、中国青海省で日本語教授をされていてぜひ慶應に日本語学校をつくって欲しくないかと要請する手紙であった。当時私は慶應大学の現役教授であったが、大学に何か施設をつくるというような問題をとりあげることができるような立場にはない一介の教授に過ぎなかった。そのとき私のやれることといえば、その手紙の要旨を塾長に伝えることであった。それと共に周さんには、私が塾長に伝えたという返事をしたのである。

ところがその手紙を受けとった周さんは、もう鬼の首でもとったように喜んだ手紙がまた来た。そこで私は、このような期待をもっている周さんのことを三田評論（第797号）の小コラムに書いて、何とか彼の希望を叶えてやりたいというアピールを塾関係者にしたのであるが、慶應にはすでに国際センターという各国留学生を対象とする立派な日本語教育施設があったから、中国人だけのための施設など作られる筈はなかったのである。従って、周さんの希望ははかない夢にすぎなくなった。しかし私としては、昔の白晳の周君の傍が忘れられず、かれの希望をいつの日か実現してやりたいという気持ちをこころの底にもっているうち、いつしか時が経ってしまった。」（最初の括弧内は筆者）

ここには、戦時中に関係が生まれた一人の

中国人から日本語学校設立の要請が来たことが大きなきっかけになったと記されている。2番目は家族の問題である。

「そのようなとき、全く想像もしなかった出来事が突如私に降りかかってきたのである。それは、大学を出て会社勤めをするようになって1年経つか経たないばかりの私の次男が、交通事故に遭って意識不明3ヶ月という文字通り瀕死の重傷を負ったのである。そのとき息子を何としても死なせたくないと思って何とか助かるようにと神に祈りに祈った。その息子が蘇ったとき、私は本当に神に感謝した。これは全く天の佑け、恵みだと思った。子供が助かるならば何でもしようと思った私は、私に出来ることなら何でもして神の恩に酬いたいと切に思ったのである。そのときハッと気付いたのは、中国からの手紙のことだった。これだ、これをやろうと私は思った。私はためらうことなく、この企てに取り組んだのである。」

内山はクリスチャンである。神への感謝の念が慈善事業への使命感となったことがわかる。

3番目は自らの留学経験である。

「また別にもう一つ、前からあった潜在的動機もあったことをつけ加えなければならない。このような願いを思いつくようになったのは、それより30年まえに遡る。1951年、私は英国政府留学生としてロンドン大学に学んだ。その頃はまだ敗戦国日本の肩身が狭いときだったが、私のつき合った英国人は親切で思いやりのあるひとが多かった。足かけ3年過ごした英国で私はいつの日にか若い留学生の世話をしたいという思いを抱いた。あの頃、ブリティッシュ・カウンシルになぞらえてジャパニーズ・カウンシルが出来ないものかと考えた。しかしそれは全く叶えられはしない夢にすぎなかった。しかしその留学体験のとき蒔

かれた小さな種が40年後に芽をふき出すことになろうとは思ひもしなかった。」

内山自身の留学経験、現地の人から受けた恩義、それは国際交流への貢献という形で結実するものだろう。

4番目のきっかけは、慶応義塾大学定年退職の後の進路である。

「それ（＝具体的な手立て）が出来たのは、私が慶應大学を定年退職すると、それから行くことになったのが松阪大学であったからである。もし松阪でなくて、東京あたりの大学が行先であったとするならば、その夢など到底叶えられはしなかったであろう。それはまことに天の導きであったというほかない。

1983年4月、私は松阪大学に来ることになった。それが大内山塾を立てる端緒になったのである。私は、梅村光弘氏（現松阪大学長）に頼んで適当な土地の紹介を依頼したのであるが、その白羽の矢が立ったのが大内山だったのである。」（最初の括弧内は筆者）

こうして内山は夢の実現に進むことになる。

3. 大内山塾の設立

3. 1. 大内山村に決定

「大内山村は人口二千に満たない山村の山合いの地であるが、その大半は山林で大内山川の清流には鮎が泳ぐという風光明媚な自然に恵まれた村であり、平家の落人が村長であるだけに優雅穏健な人柄の人が多く人情豊かな村であって、村をあげて私の来住を迎えてくれた。私はその自然と人にと惚れこんで、塾をつくるならここだときめてしまった。予想に違わず、大内山村は私の企てを全面的に応援してくれたのは何よりの仕合せであった。」

この文章の中にある「全面的に応援」について内山が執筆した日誌から抜粋する。

「1984年1月2日 塾生の最初の仕事であ

る森林作業を引受けてくださる吉田勝幸理事宅に招かれ、豪華な正月料理をご馳走になる。その後でこれからの作業に使う装具一式を提供され、地下足袋をはいたりして、働きながら学ぶ気概は出来たようであった。

1月4日 朝7時吉田本家のマイクロバスが迎えに来て、峠を越えた紀伊長島の森林に除伐作業に出かけた。印のついた木を切り倒すのであるが、急斜面でやるので骨も折れる。僕もやるだけやってみたが、すぐ汗ばむ。塾生がそれとなく僕を見守っていてくれるのはうれしかった。

1月18日 塾生の中日本語専攻者は、交替で山仕事でなく中国語を教えることになったが、その2名は年長でもあるのでいいだろう。」

3. 2. 開塾の準備

まず塾を建設する土地の確保。

「大内山村は、当時人口二千の過疎の村であったが、村長助役以下が熱心に協力して、面積723㎡、建坪341㎡の工場跡の土地をさがしてくれたので、1983年の春その工場を改造して、5月の初めには学寮施設が完成した。まだ留学生が来るとはきまっていなかったもので、とりあえずその教室で村の子供たちに勉強を教える文字通りの学習塾をオープンした。私は英語を教え、算数国語などは私のゼミのOBが東京から来て教えてくれた。」

次に寮や設備品の準備。

「塾である以上、塾生（留学生）を収容する寮が必要である。衣食住のための用具はどうするかには私は先ず頭を悩ませた。土地建物に使ったあとの退職金に残りは僅かである。これを手にして当たれるところには当たり、頼めるところには頼みこんだ。松阪大学からは、寮で不用になったベッド、ストーブ類を頂いた。布団や学用品、本棚などは、鎌倉の清泉小学校から寄附して頂いた。シーツ、毛

布類、食器、鍋釜類は日本郵船の横浜支店から船用品をわけて頂いた。……。何よりも助かったのは、塾では絶対に必要な机、椅子類がブラザー工業株式会社から届けられたことである。」

文中に述べられているように、内山は自分の退職金を投じて大内山塾を設立したのである。

三つ目に塾として図書類を揃えなければならない。

「大内山塾は単なる寮ではなく学習の場である塾なので、その必ずなければならないのは図書、ライブラリーである。それは最初私の本を書架に持ちこんだが、それでは足りなかったところ、その最初の充実第一弾は、東京の宮武謹一先生から来た。宮武先生は、松本重治先生と同じく戦前からの上海を舞台とされた中国研究の先蹤であるが、先生は私の中国留学生塾建設に諸手をあげて賛成され、エンサイクロペディア・ブリタニカ全巻をはじめ貴重な辞典類を大量に寄附して下さった。……。また図書といえば、ゼミOBの諸君が相次いで各種の図書を送って来られたので、辞書類をはじめ新刊図書類も書架一部屋分位が入り、その後も塾充実のために大いに協力をされる方があとをたたない。」

3. 3. 留学生の入国手続き

この頃は、市民が中国から出国するのは困難だったようである。中国の情勢を1970年代から年表を通して確認しておきたい。亀井・三上・林（2012）はこの時代を以下のように記している。

- 1973年 十全大会開く（毛周体制は不動。林彪事件の総括と首脳部人事の公表、批林整風の強化）
- 1974年 国慶節前夜祭において文化革命中に批判された幹部30余人を復活。
- 1975年 第4期全国人民代表大会会議開く。

鄧小平、筆頭副首相となる。中国改正新憲法発表、国家主席廃止、党主導の社会主義国家と規定。

- 1976年 周恩来死（1月）、毛沢東死（9月）。華国鋒、党主席・首相就任。江青ら四人組追放事件。
- 1977年 鄧小平復活、副主席就任。
- 1978年 新憲法公布、新国歌制定。毛沢東批判の壁新聞騒動。「四つの近代化」路線決定。
- 1979年 米国と国交正常化成る。
- 1980年 劉少奇の名誉回復。毛沢東批判始まる。華国鋒首相辞任、後任趙紫陽。林彪・江青らの裁判。
- 1981年 党主席胡耀邦就任。
- 1982年 新憲法制定（国家主席制復活、文化大革命色一掃）。
- 1983年 死刑判決の江青・張春橋らを無期懲役に減刑。

まさに政治の季節であり、文化大革命による後遺症から立ち直ろうとする政治エネルギーの爆発した時代であった。学問のために留学をしたいなどという希望は叶えられそうもない社会風潮であっただろう。そういう中、内山は寮に留学生を招聘しようと努力する。

「外国から留学生を招くことは私には全く初めての経験であったので、最初この中国留学生を招くきっかけをつくってくれた周玉潘氏に大内山塾に来て見てもらうことにして青海省に連絡したところ、当時青海省教育局の副局長だった李葉女史が周先生と共に来日されたのは11月であった。この両氏が成田空港に到着し、約10日間日本に滞在して留学生来日のための瀬踏みをして帰国されたが、実際に青海省からの留学生来着が翌年9月であった。このことからいかに招くこと自体が困難だったかわかるであろう。

1期生の来日が1983年中に実現したのは、

何といっても中国大使館の張連芳二等書記官が与って力あった。張書記官がその出身たる黒竜江省へ連絡され、その高等教育局が積極的に動いたので、先発の青海省より早く黒竜江省から来日したのである。しかしこれは国際交流基金の小熊旭氏が中国大使館の張書記官を紹介されたので、この意味では小熊氏も大内山塾創成の恩人の一人である。

また第1期生を招くに当たっての幸運も見落とすわけには行かない。10年まえには留学生を呼ぶことはそう簡単に出来ることではなかった。国費留学生のようなルートに乗っている場合は別として、私費留学生の場合には、来日のための手続きだけでも大変であった。大学などすでに交換留学の軌道が出来ていない、全く無から始めた大内山塾としては、とにかく初めて受け入れるのに、外務省領事移住部に飛びこんだところ、その当時の部長がF氏だったことは本当に地獄に仏と有難かった。その査証をとるには外務省査証室を通ずることが要件であったが、たまたまそのときそれを主管する領事移住部長は、40年前、私の英国留学当時親しかった外交官補だったF氏だったのである。そのF氏が法務省の入国管理局に連絡するなどよく尽力されたのは望外の幸運だった。こうして外務省から電報を打ってもらって日本側での入国手順がうまく運んで、北京で待機中の1期生6名が大阪空港に着いたのは、1983年も暮に近い12月6日のことであった。」

内山は塾生の招聘のことで随分と労力を使っている。モノの世界を操ることも大変であるが、ヒトの世界を操ることは輪をかけて苦勞が多い。留学生を呼ぶことに伴う業務は、査証を取得するだけではなく、中国側、特に高等教育局との折衝や協定書締結、また留学生の選考など、中国に出向いて行わなければならないものもある。内山の書いた1984年の

日誌には次のように書かれている。

「7月20日 日航721便で成田を立ち、11時半北京空港着。黒龍江省高等教育局の吳鉄民氏、それから青海省高等教育局の黃克廉庁長はじめ旧知の李葉、周玉潘氏に迎えられた。夜は青海省主催の晩餐会があり、友誼賓館に入って泊まる。

7月21日 吳鉄民氏の案内で、万里長城見学、後万寿山頤和園見物。

7月22日 ハルピン着。高等教育局の孟新先生、戴秀珍先生に迎えられる。午後は市内見物、松花江をフェリーで渡り、太陽島に行く。夜は黒龍江省高等教育学会の李会長の招宴。

7月23日 ハルピン師範大学訪問。閻曉群校長以下立会いの下に第2回留学生の選抜を行う。張曉華、朱雁の両君は日本語テストも文句なく直ちに決定する。他の者は遠慮して貰う。大学の教員食堂での中国料理は心こもった実においしい御馳走であった。午後は黒龍江大学訪問。ここでも剛校長以下の心からの歓待に与った。ここで面接したのは鄭哲浩君のみで、これは決定、第1期生王潜君の父上は事務局長で背高く立派な方であった。

7月24日 東北林学院訪問。この大学の規模は大きく、東大の駒場のようである。校長先生、蔣外事主任、裴克図書館長すべて熱烈に迎えて下さり、感激的であった。

7月25日 午前中、ハルピン児童公園に行き、すべて子供達の手で運行する鉄道に乗り快適であった。午後は、志望者3名に面接したが、林学専攻の黃鈞君を含め2名を来年度留学生に決定した。午後、孟新先生と留学生受入れについての協定書作成は、滞りなく完了した。……。夜8時北京着。

7月26日 ……。午後、戴、隋先生と西安に立つ。

7月28日 5時53分、名残惜しい戴、隋先生に送られて西安を立ち、青海省の馬銘先生

案内の下に西寧に向う。夜行列車26時間の旅である。

7月29日 西寧着、黄克廉先生はじめ留学志願者に迎えられ、西寧賓館に入る。夜は、黄静波青海省長主催歓迎晩餐会。

7月30日 西寧賓館において留学生選考を行う。昨年推薦された者の中、王作全、趙小蘭、潘曉寧の3名は日本語もまあまあだったが、他の3名は日本語がよくわからない上、大学学部1、2年生なので、これは卒業後まで待つて貰うことにした。

8月1日 午前中、黄庁長来室、留学生に関する協定が出来て無事署名調印した。

8月2日 朝、まだ7時45分、小雨の西寧を立ち蘭州に向う。飛行場まで約250キロあり、自動車だとばして1時すぎに漸く着く。空港ロビーに青海省日本語試験で一番よく出来た王冠明君が来たので面接するに、日本語もしっかり話せる上、人物が実に頼母しく、今度の中で最優秀者だと思った。黄克廉庁長も、その専攻を林学に志望を変えることを諒承されたので、最終決定をした。」

4. 財団法人大内山塾の誕生

4. 1. 法人化への道

単なる塾ではなく「対外信用」を持った体制を取りたいと思っていたところ、佐治良三・小平敦の両氏からアドバイスをもらったという。

「塾法人化を第一に提言されたのは、当時の国鉄弁護士であられた佐治氏と当時三井信託銀行顧問の小平氏であった。佐治氏は何はともあれ法人化を、小平氏は塾を公益信託をと提案された。信託については斯界第一人者である小平氏が積極的に推奨され、懇切な御高示を頂いた。この線に沿って塾の法人化の準備を進めることに」した。

次が発起人の方々である。

天城 勲	文部省顧問
飯野 匡	元三井銀行副社長
乾 昭二	大内山村長
乾 英夫	乾林業株式会社取締役社長
宇田信一郎	NHK国際協力部長
梅村清明	松阪大学学長
衛藤藩吉	東京大学教授
小野 晋	日本郵船株式会社取締役社長
大野勝巳	外務省顧問
川喜田かしこ	東和映画株式会社社長
小平 敦	三井信託銀行顧問
佐治良三	弁護士
斎藤鎮男	プレスセンター理事長
高橋通敏	鹿島平和研究所常務理事
高村象平	元慶應義塾長
服部謙太郎	服部時計店会長
速水 勉	日本林業経営者協会副会長
松村正義	国際交流基金視聴覚部長
松原秀一	慶應義塾大学国際センター所長
三宅喜二郎	外務省研修所顧問
安井信之	プラザー工業株式会社副社長

(五十音順)

発起人会は1983年9月4日に開かれた。種々の意見交換の結果、「最初は公益信託案が出されたのであるが、結局最終的には塾は三重県にあるので、東京で法人にするよりも、地元ですの方がよいということで、財団法人にすることになり、その申請には、中央官庁にするよりも、三重県庁にする方が適切であるということになって、佐治弁護士は、名古屋からわざわざ津まで足を運ばれて交渉を促進された。設立許可申請書は昭和59年3月15日に提出された。その主務官庁として三重県教育委員会から許可が下りたのは3月16日、設立登記が完了したのは4月12日であった。」

財団設立の趣意書は次のようである。

「我が国の国際的地位が向上したことに伴い国際親善の促進、国際文化交流の発展に対

し、日本中部に位置する三重県もまた関心を高めていることはいうまでもないところであります。

この国際交流、特に中国近隣諸国との交流は、三重県にとっても重要であり、大内山塾を設立することにより教育文化の相互紹介や地域住民へのコミュニケーションの機会提供は、地元文化の発展さらには県民に対して社会教育に資するものであります。

特に我が国に歴史的に深いかわりをもつ中国を中心とする近隣諸国から、自然に恵まれ人情豊かな大内山村に留学生を招致し、語学と生活指導及び実地研修による技術指導を行うとともに、留学生を通じて県民と諸外国との国際理解を深め、また各種講座や交歓会を通じて教育文化の交流を図り、ひいては県民に対する社会教育の向上に貢献しようとするものであります。

昭和59年3月16日

設立者 三重県度会郡大内山村
法学博士 内山正熊

4. 2. 塾に流れる精神

内山は塾創設の精神を次のように述べている。

「大内山塾創設に最初から関心を寄せられ5年間にわたり全面的協力をされたのは故松本重治先生であって、発起人会が国際文化会館で開かれたとき、その会場にわざわざ足を運ばれ、先生はまた顧問就任を快諾され、1998年御長逝になるまで大内山塾に温かな御援助を続けられた。後顧問には、岡崎嘉平太先生も御就任下さったが、大内山塾のモットーたる「勤工儉学」の周恩来総理の言は先生が御高示下さったのである。

勤工儉学－働きながら学ぶ－は、私の敬愛してやまない周恩来総理の信條であったが、このイズムを地で行っているのが大内山塾で

ある。1年の半分は日本語を特訓、あとの半分は現場実習、これを終って大学院へ進学させるというユニークな学塾が大内山塾である。中国の資源と日本の頭脳を結びつけて日中両国が榮え、平和と繁榮に寄与すべく、次の世代を担う中国の若者が、この草の根の日中友好の場から巣立つのを私は強く期待する。

岡崎嘉平太

内山正熊編（1999）の扉には次のように書かれている。

「和中協和」の先覚先縦

松 本 重 治

岡 崎 嘉平太

川喜田 かしこ

三先生に本書を捧げる

内山正熊

4. 3. 塾設立の趣意書

内山は塾設立の趣意を次のように述べている。

「大内山塾趣意書

1. 本塾は、日中友好親善のために、中国人留学生に日本語を習熟せしめる補充教育を行うことを目的とする。
2. その学習に当たっては、地元森林資源を活用して、主として林業などの技術を修得する実学を行うことにする。
3. 上目的の達成には、単に日本語学習のみでなく、日本の社会になじむことが必要であるから、来日直後のカルチャー・ショックをやわらげるために、落ち着いた生活環境で日本人と地域交流する機会をもつ学塾寄宿舎を三重県度会郡大内山村に設ける。
4. 日本語学習は、名古屋大学総合言語センターのスタッフ指導下に行われるが、こ

れに加えるに松阪大学教授による一般教養講義を通じて行われる。

5. 留学者の言語文化風習の相違による精神的、経済的不和、不安定を緩和するために、小規模の寄宿寮で、中国人をして自らの手で自活共同炊事制をとらしめ、自主的な生活条件で勉学せしめる。
6. 留学者の選抜は、林業専攻者が優先される。
7. 在塾期限は原則として1年とし、収容定員は当初10名とする。学費は、中国留学生研修協賛金により賄われる。
8. 上全体の責任者は、慶応義塾大学名誉教授、法学博士内山正熊とし、その現地所有の家屋土地施設が提供される。」
こうして大内山塾は14年に亙る活動を開始したのである。

5. 塾生データ：氏名、出身地、現在の活動

内山がどのような塾生を受け入れて教育を実施したか、また、卒業後どのような活動を行っているかを記すことにしたい。

筆者は最初、塾生の氏名を掲載することのためにためらいがあった。実名を出してもいいものかかどうか大いに迷った。日中関係の政治上の悪化を懸念し、実名を出すことを控えようかと考えた。しかし一方、大内山塾に在籍したことは塾生にとって名誉あることではないかとも考えるようになった。そこで、横浜で活動している第3期生の焦楊さんに連絡を取り、塾生の意向を尋ねることにした。その結果、連絡が取れた塾生の多くが実名の掲載に同意し、中国に在住の塾生からは、大内山塾に関する文章が公表されることを喜んでいるとの報を受けた。このような経緯を踏まえて、塾生に関する最小限の情報を公にすることにす。第1期から第14期までの各期の塾生の配列は内山正熊編（1999）に従った。

以下は、2014年7月時点のものである。先ほど触れた第3期生の焦楊さんが提供してくださった。

1期生

高 潤生	黒龍江省	書道篆刻家 博士課程修了
王 克西	黒龍江省	筑波大学講師
王 潜	黒龍江省	住建（上海）有限公司副工場長 博士
魏 占財	黒龍江省	黒龍江林業職業技術学院教授
王 正暄	黒龍江省	黒龍江信息技術職業学院副院長
于 金	黒龍江省	河南大学商学院教授 博士

2期生

王 作全	青海省	青海省民族大学法学院教授・青海省法学会副会長 博士
潘 曉寧	青海省	上海丸倉工貿有限公司副董事長・副總經理 修士
趙 小蘭	青海省	修士（三重大学）
王 冠明	青海省	農学博士（京都大学）
張 曉華	黒龍江省	ハルビン師範大学外語系
朱 雁	黒龍江省	新潟大学博士課程修了
鄭 哲浩	黒龍江省	結雅希（上海）貿易有限公司 修士
朱 自力	河北省	不明
胡 亜軍	河北省	河北省草莓研究所
3期生		
焦 楊	河北省	（株）メディア新日中社長 修士
池 慧明	河北省	妆网创始人（粧網創作者） 修士

内山正熊と大内山塾（1）（藤原 雅憲）

安 成才	黒龍江省	北京大学生命科学 学院教授 博士			業有限公司（中国 總經理）
鄭 小賢	黒龍江省	北京林業大学教授 博士	王 先奇	黒龍江省	東洋インキ株式会社 修士
黄 鈞	黒龍江省	山東省済寧市国際 貿易公司	張 迺婕	山西省	歯学博士（東京医 科歯科大学）
楊 銘鐸	黒龍江省	黒竜江省科学技術 協会副主席 修士	白 智立	内蒙古自治区	北京大学政府管理 学院副教授、副院 長 博士
劉 国邦	青海省	GIF Research Center (China) Co., Ltd Product Director 博士	6 期生 張 薇	河北省	愛知教育大学大学 院修了
任 利民	青海省	ダイム技術サービ ス（株） 修士	劉 静	北京市	アメリカ在住
段 克勤	青海省	北京林業大学外国語 学院副院長 博士	7 期生 張 成林	青海省	株式会社FBC大阪 本社管理部 博士
4 期生 程 鵬	黒龍江省	工学博士	鄒 国輝	北京市	北京林業大学組織 部長 修士
莫 紅麗	広西自治区	貿易会社華南地域 総監 修士	段 瑞聡	内蒙古自治区	慶応義塾大学商学 部教授 博士
劉 占仁	青海省	杭州博野精密工具有 限公司社長 修士	赤旦多傑	青海省	青海民族大学経済 学院教授 修士課 程指導教官、青海 省人大咨諮問委員 会専門家
韓 海栄	青海省	北京林業大学副林 学院院長 博士			
焦 曉鹿	青海省	青海省畜牧庁			
李 国泰	青海省	青海省湟源畜牧学院	李 芳	河北省	河北大学外国語学院 日本語学部副教授
5 期生 呉 有紅	青海省	岐阜大学大学院工 学研究科博士課程 修了	8 期生 沈 悦	北京市	兵庫県立大学大学 院教授 博士
張 磊	青海省	皇學館大學文学部 教授 博士	宋 吉青	青海省	中国農業科学院農 業環境及び可持続 發展研究所（中日 センター）博士
劉 安軍	河北省	北海道大学大学院 農学研究科博士課 程修了	徐 浩	青海省	青海省旅游局副局長
王 徳軍	黒龍江省	二幸商事株式会社 （日本 代表取締 役社長） 千輝菓	9 期生 張 武慶	内蒙古自治区	中国サンヒル株式 会社副社長 修士

王 慧鋒	黒龍江省	不明	13期生		
劉 震	河南省	河南農業大学林学院 副院長・教授 博士	全 海	北京市	北京林業大学党委 員会 副書記
余 亮	北京	和平フレーズ上海 事務所 修士	劉 星	河南省	不明
関 曉媚	黒龍江省	黒龍江省工業交通 幹部学院教員	王 喜平	北京市	不明
10期生			14期生		
程 士国	雲南省	不明	李 国軍	内蒙古自治区	天津日系企業勤務 修士
楊 喜田	河南省	河南農業大学資源 与环境学院教授・ 院長 博士	楊 大白	雲南省	雲南省大理市中共 委員会宣伝部 副 部長
劉 岩	北京市	無錫東永貿易有限公 司 總經理 修士	張 公道	雲南省	雲南省大理市人力 資源和社会保障局 副部長
蔣 小平	河南省	中州大学社会科学 部主任・教授	6. 本稿を終えるにあたり		
岳 健捷	北京市	北京林業大学図書館	本稿では、大内山塾の誕生の経緯を振り返るとともに、元塾生のその後の活躍を記すことで、同塾の役割の大きさを確認することができた。		
11期生			次の稿では、内山が塾をどのように運営していったか、また運営する中でどのような問題が生じたか、などを日誌を通して明らかにしたい。		
呉 炳雲	北京市	東京大学大学院農 学生命科学研究科 助教 博士	参考文献		
胡 偉	牡丹江市	黒龍江省林業科学 院林副特産研究所 党委書記・研究員	内山正熊（1995）「日清戦争百年」, 日本国際政治 学会『国際政治』第109号, pp.141-149.		
王 雁華	哈爾浜市	黒龍江信息技術職 業学院教務處處 長・教授	内山正熊編（1999）『大内山塾を巣立った若者達』 （光出版印刷株式会社）		
12期生			（財）大内山塾（1983-1998）『大内山塾年報』第 1号-第14号		
周 鴻昇	北京市	国家林業局 林産 工業規劃設計院院 長・教授高級工程師	（財）大内山塾（1993）『大内山塾十年の歩み』（光 出版印刷株式会社）		
朱 建軍	河南省	上海市農業科学院 研究員 博士	亀井高孝・三上次男・林健太郎編（2012）『標準世 界史年表』（吉川弘文館）		
			福澤武（2007）「内山正熊ゼミに学んで」 http:// keio-ocw.sfc.keio.ac.jp/j/lec_and_me_5.html		